



TITLE:

范寧の生活と學問

AUTHOR(S):

吉川, 忠夫

CITATION:

吉川, 忠夫. 范寧の生活と學問. 東洋史研究 1967, 25(4): 482-508

ISSUE DATE:

1967-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152736>

RIGHT:

范寧の生活と學問

吉 川 忠 夫

一 緒 言

東晉の范寧の名は、「春秋穀梁傳集解」の著者として今日なお不朽である。この穀梁傳についてのまとまった注釋のほかに、范寧の著作として、「古文尚書舜典注」一卷、「禮雜問」十卷、「春秋穀梁傳例」一卷、「范寧啓事」三卷のあったことを、「隋書經籍志」は傳えている。「穀梁傳集解」をのぞいて、彼の著作のほとんどが失なわれてしまった今日、「論語義疏」あるいは「通典」禮典のなかに、斷片的ではあるけれどもかなり豊富に、彼の主張の残されていることは幸いとしなければならぬ。ともかく、上にあげた范寧の著作リストから、彼が忠實な儒家の徒であったことを容易に思わせるけれども、その彼がまた當時の佛教界

と交錯するいくつかの事蹟をもつ事實が象徴的に示すように、この時代の思想家の例にもれず、范寧の場合も經學史の立場からのみその學問を考えることはできないと思う。そこで私は、范寧を素材としながら、經學史にとらわれない六朝精神史の一こまを描きつつ、彼の學問のありかたが、彼が一門閥貴族であったことと深くかわっていると考えられるために、門閥貴族における學問のかたちを主要な問題として考えてみることにした。范寧の學問を語るまえに傳記についてふれたのは、彼の學問の生みだされた歴史的社會的な背景を見さだめておかんがためである。かつまた范寧は、劉宋初の踞食論争で名だかい范泰の父であり、「後漢書」の著者たる范曄の祖父でもあって、范泰あるいは范曄の思考方法のうちには、確實に范寧からの影響

を認めることができる。そのことまで本稿で説きおよぶべくもないけれども、學術を中心とした范氏の門閥史を書きたいと計畫している私が、范寧においてその原點を確認しておきたいと考えたこと、そのことがまた本稿執筆の一つの理由でもある。

二 范寧の出發點 — 王弼何晏論 —

范寧(晉書七五)字は武子、東晉の安北將軍徐兗二州刺史范汪の子である。父汪の幼少のころ、南陽郡順陽縣の范氏はまったく振わず、孤貧の境遇から身をおこした汪は、もぢまへの才覺によって、彼の一代に一おうの地位を門閥貴族社會に築きあげたのであった。そして汪は、時の執政であつた會稽王司馬昱の寵愛をうけ、升平五年(三六一)には、安北將軍徐兗二州刺史、つまり北府軍團長に任命された。そのころ、荊州に據る軍閥の桓溫は確實にその勢力をのびしつとあり、司馬昱を頂點とする中央政府をにらみつけて、政局には暗雲がたれこめていた。汪はかつてこの桓溫の屬僚でありながら、そのままそのもとながくとどまることを拒否したため、桓溫は汪に對して遺恨をいだいて

いたのである。その汪が司馬昱から要職を與えられたことは、桓溫によい印象をあたえなかつたにちがいない。はたして桓溫は一つの陷穽を設けた。彼は北伐を行なうと稱して、北府軍團に軍隊の出動を要請してきた。汪は要請に應じたにもかかわらず、軍期におくれたことを理由に、桓溫は汪の解任と庶人の身分に貶すことを要求した。第一級の實力者のこの處置に對して、あえて異議を唱えうるものは、もはやなかつた。汪はわずか八カ月で安北將軍徐兗二州刺史の地位を失なつた。こうして父汪が蟄居を強いられたとき、范寧は二十三歳であつた。^①

これ以後、桓溫の生きてゐるかぎり、范氏の人たちの官界進出の道はかたく閉ざされた。范汪が失脚しただけではない。司馬昱は青年に達した寧を辟召したいと考えたけれども、たちまち桓溫の反對にあつた。いまや桓溫を牽制しうるだけの實力者はなく、興寧三年(三六五)には荊州から姑孰に移鎮し、太和三年(三六八)には殊禮が加えられ、桓溫の王朝篡奪はもはや時間の問題となつた。太和六年(三七二)、廢帝司馬奕が廢せられたあとに司馬昱が簡文帝として立てられたのは、篡奪のより確實な前兆である

と思われた。こうした桓溫の篡奪の意圖は、わずかに朝臣の謝安、王坦之、王彪之たちの畫策によつてはぐらかされ、その實現が一日のばしに延引されていたにすぎない。

范氏一家の人たちにとって、桓溫在世の時代がいかに暗く閉ざされた日々であつたかは、寧の姪の范弘之が桓溫の故吏であつた王珣に與えた書簡のなかで、のちに告白するところである（晉書九一）（范弘之傳）。この失意の時代に長兄の范康は夭折し、父汪が築きあげた門閥の地位を維持してゆくべく期待をよせられる人物は、寧をおいてほかにはなかつた。彼は書籍を博覽し、學問に精勵した。そしてこの時期に重要な論文を發表した。すなわち「王弼何晏論」である。

「王弼何晏論」執筆の時期を確定することはむづかしいけれども、その執筆の動機について、本傳には、「時に浮虛相い扇え、儒雅は日々に替るるを以て、寧は以爲えらく、其の源は王弼と何晏に始まり、二人の罪は桀紂より深く」と説明する。文中の「浮虛」なる言葉に注目するならば、この論文が當時の流行であつた清談への批判として書かれたと考へて誤らないであらう。當時の清談界の領袖は、ほかならぬ司馬昱であつた。そして寧の父の范汪もかつて

司馬昱の清談サロンに加わつたことがあつたらしい（世說新語）（排調）。また寧の從叔父、つまり汪の從父弟の范啓が、司馬昱の清談グループの一その寵兒であつたことは、「世說新語」文學、排調、輕詆の諸篇に傳わる逸話のかずかずが示している。かく、范氏一家にも當時の清談界と深くかわりあう人物の存在していること、かつ暗く閉ざされた環境のなかで「王弼何晏論」が生まれたことを思うならば、この論文が、寧のよほどきびしい反省のうえにたつて書かれたものであつたことを考えさせる。しかもわかい日のこの論文は、その後の彼の方向を決定づけ、彼の思想の出發點となつたものであつた。

王弼と何晏の二人は、いうまでもなく魏晉玄學の鼻祖とされる人物である。寧の論文はそもそも「平叔（何晏）は神懷超絶し、輔嗣（王弼）は妙思通微す。千載の類綱を振い、周孔の塵網をふるい落とす。斯れ蓋し軒冕の龍門、濠梁の宗匠なり」と絶讃する論者への反論として書かれ、彼ら二人の浮華なる言説が後生を亂惑することはなほだし、ために禮樂は崩壞し、中原の傾覆、すなわち西晉王朝滅亡という悲惨な事態を招くにいたつたことを指摘する。

それは、王何の亞流と考えられる司馬昱たち當時の清談の徒にむかつて、桓溫の跋扈を許した責任を追究し、彼らの覺醒をうながす意圖のもとに執筆されたものではなかったか。桓溫もまた一人の談論の名手ではあったけれども、それにもまして司馬昱の清談癖が政治の不振をもたらし、桓溫につけるすきをあたえたことはたしかであった。「簡文（司馬昱）の相と爲るや、事は動に年を経て然る後に過すを得たり。桓公（桓溫）は甚だ其の遲きを患い、常に勸勉を加えしに、太宗（司馬昱）の曰わく、へ一日萬機、那んぞ速やかなるを得ん」（世説新語）。政務凝滞の理由を、清談の一型式である機智的な言葉によって説明しているところに、司馬昱の面目がうかがわれる。ところで寧は、「王弼何晏論」でどのようにのべているか。

「王何は典文を蔑棄し、禮度に遵がわず、遊辭と浮説もて後生を波蕩す。華言を飾りて以て實を翳い、繁文を騁せて以て世を惑わす。摺紳の徒は翻然として轍を改め、洙泗の風は緬焉として將に墜ちんとす。遂に仁義をして幽淪せしめ、儒雅をして蒙塵せしめ、禮は壞れ樂は崩れ、中原は傾覆す。古の所謂の言は僞にして辯、行は僻りて堅き者

（禮記）とは、其れ斯の人の徒なるか。」

王何二人の罪にくらべるなら、桀紂の暴虐はまだしもよい。「身を滅ぼし國を覆えしたるを以て後世の鑑戒と爲すに足る」からである。桀紂の「一世かぎりの禍」、「自ずから喪びし録」は輕小であるのにくらべて、王何の「歷代にわたる罪」、「衆を迷わせし愆」は重大である、という。

この「王弼何晏論」と執筆の時期があい接近し、かつ執筆の動機のきわめてあい類似したものとして、寧の九歳年長の妹婿である王坦之^⑧（三七〇）の莊子彈劾文、「廢莊論」（晉書）をあげてよいであろう。「廢莊論」が、「時俗の放蕩にして儒教に教からず、頗る刑（形）名の學を尙ぶを尤だ非として」執筆されたと説明されるのは、「王弼何晏論」

の場合と近似しているし、また王坦之が、司馬昱の清談グループの代表格であった支遁と意見があわずに「沙門不得爲高士論」を世に問うたこと、また支遁の談論を「詭辯」と譏ったという「世説新語」輕詆篇に傳わる逸話も同時に注目されてよい。かく二篇の論文は、ひとしく清談を批判し、沈滞している儒家の教説の復興を意圖して書かれたと思われるが、寧と王坦之の議論の展開のしかたは、か

ならずしも同じではなかった。したがって、「王弼何晏論」を「廢莊論」と讀みくらべてみることに、寧の主張の輪廓を一そうきわだたせることができると思われる。

王坦之はいう。「孔父（孔子）は體すること遠からざるには非ず。體すること遠きを以ての故に用は近し。顔子（顔回）は豈に德を具えざらんや。德備るを以ての故に教に膺る。胡爲れぞ其然る哉。已むを獲ずして然るなり」。つまり、儒家の聖人賢人は道あるいは德の體得者なのであって、わざわざ莊子をかつぎだす必要はない。ただ彼らは道を體すること深く、完全な德の具備者であるがゆえにこそ、その外面にあらわれたはたらき——用——はかえて卑近であり、やむにやまれぬ心情より發して世俗の教化にあたったのであった。「道を語りながら其の爲を失なう者」、また「德を辯じながら其の位を有つ者」、すなわち莊子は、眞の道あるいは德の體得者ではありえない。にもかかわらず、詭譎恢誕の莊子の言説が世に蔓延しているために、「禮は浮雲と俱に逝り、僞は利蕩と並び肆まなり。人は克己を以て恥と爲し、士は無措を以て通と爲す。時に德を履むの譽無く、俗に義を蹈むの徳有り」。では眞の道ある

いは德はいかなるものとして説明されるであらうか。「夫の利して害せざるが若きは天の道なり。爲して爭わざるは聖の德なり（老子八章）。群方の資る所にして誰氏なるかを知る莫し（老子四章）。儒に在りて儒に非ず。道に非ずして道有り。九流を彌貫し、彼我を玄同し、萬物之を用いて既さず（老子三十五章）。臺臺として日に新たにして朽ちず。昔し吾が孔老固より已に之を言えり」。

ここで孔子とならんで老子が同格にとりあつかわれていること、したがって莊子と老子とが峻別され、莊子が老子の低位におかれていることとともに、もっぱら老子の言葉や思想をかりつつ、儒家の聖人が老子的な道あるいは德の體得者として描かれていることは、はなはだ注目にあたいするであらう。王坦之は、儒家の聖人が普遍的な道の體得者であったことを示し、その道——體——と道の外面にあらわれたはたらき——用——との關係を説明したわけであるが、范寧はもっぱらその用の側面に注目したといえよう。二人ともひとしく清談を批判し、儒家の教説の恢復を叫びながら、王坦之が儒家の教説を内面化し、哲學的な解釋をほどこしたのに對して、寧は外面化し、客觀化して、つまり用

の側面にとらえたのである。用の側面というのは、すなわち禮教であり、そのことは、王弼何晏を、もっぱら「禮度に遡がわず」、「禮樂を崩壞させた」ものとして糾弾する寧の姿勢のなかに的確に認められよう。かつ儒學の用の側面の強調は、寧の一生を通じて變らぬ態度であつた。彼が禮教の擁護者として行動したこと、そして彼の學問體系のなかで禮學が大きな部分をしめたことなどは、のちにあらためてふれたいが、かかる彼のその後の方向は、すでに「王弼何晏論」に胚胎していたとしてよい。

三 理想主義の挫折

范寧は世間も思いがけぬ桓溫の突然の死のおかげで、すなわち寧康元年（三七三）以後になつてはじめて餘杭令として仕官することができた。三十五歳ちかくになつてからのおそい仕官である。餘杭で六年間の在職期限を満期一ぱいつとめあげたあと、臨淮太守にうつり、陽遂郷侯に封ぜられた。そしてやがて中央官界に中書侍郎の地位を得た。

「その時、更たに新廟を營み、博く辟雍明堂の制を求む。寧は經傳に據つて奏上するに皆な典證有り、」と記される

のは、彼のなみなみならぬ禮學の知識を證明するものであり、また朝廷に疑議がもちあがるたびに下問があつたというのも、彼の知識の該博さを示すことである。彼が目痛を患つて、同じく中書侍郎の張湛に處方をもとめたところ、「用つて讀書を損らすこと一、思慮を減ずること二、内視を専らにすること三、外觀を簡にすること四、旦は晩く起ること五、夜は早く眠ること六。凡そ六物をば熬るに神火を以てし、下すに氣符を以てし、胸中に蘊むこと七日。然る後に諸を方寸に納め、之を一時に修むれば、近きは能く其の目睫を數え、遠きは尺捶の餘を視る。長く服して已まずんば牆壁の外を洞見せん。但だ目を明らかにするのみに非ず、乃ち亦た年をも延ばさん、」と揶揄されたという話柄は、寧の精勵恪勤な勉強家ぶりを彷彿させてくれる。

かくして寧は、おそらくその豊かな知識とすぐれた學問のゆえに、孝武帝の信頼を集めたのであるが、そのころ、各勢力間の意見の調整につとめて東晉王朝内に一おうの安定をもたらしした謝安（三八五）はすでに世になく、帝の弟の會稽王司馬道子が權力を集中して、中央の政治は世紀末

的な放埒をきわめていたのであった。この司馬道子に媚態を示してかぎらない寵愛をうけたのは、ほかならぬ王坦之の第三子であり、したがって寧とは舅甥の間柄にある王國寶であった。「儒雅方直」の寧は王國寶をあくまでにくだ。そしてその貶黜を帝に進言した。このため王國寶は、

これまた司馬道子の寵愛あつゝい哀悦之をひそかに尼支妙音のもとに使わし、支妙音から皇太子の母たる陳叔媛に、

「國寶は忠謹にして宜しく親信せらるべきこと」を傳えてほしいと運動した。帝はことの顛末を知ると激怒し、哀悦之を殺してしまった。王國寶はあわて、今度は司馬道子とともに舅范寧のことをしきりに帝にむかつて譖言したため、かえって寧は孤立するにいたつた。かくて寧は、混亂汚濁した中央政界に見きりをつけ、みずから求めて豫章の太守となつたのである。帝は故事にてらして、「豫章は太守に宜しからず。何ぞ急ぎ身を以て死を試みるや、」と翻意をすすめたけれども、彼の決意はあくまでかたく、帝もやむなく同意したという。太元十三年（三八八）のことであつたと推定される。⑥ ところでこの事件が范氏と太原の王氏とのあいだの葛藤からもたらされたものとは考えにくい。

王國寶の弟の王忱と范氏とは、その後もかわらぬ親密な關係をもちつづけているからであり、舅の范寧と甥の王國寶とのあいだに生まれた衝突は、あくまで「直言して諱むこと無く」(本傳)、「心を正直に措く」(晉書九一) 寧の性格に起因したものであつたと思う。

そのことと関連して、「論語義疏」(以下、「義疏」と略稱)に引かれた寧の注釋のなかに、佞者、諂者をにくむ言葉のきわめて多いことに注意しておきたい。「哀公は賢を捨てて佞に任ず。故に仲尼は此の言〔舉直錯諸枉則民服、舉枉錯諸直則民不服〕を發し、賢を擧げて以て民を服せしめんと欲するなり」(爲政、哀公問曰何爲則民服章)。「祝鮀は佞諂を以て靈公に寵せられ、宋朝は美色を以て南子に愛せられ、無道の世に並びに以て容れらる。孔子は時民の濁亂し、唯だ佞色のみ是れ尙ばれ、忠正の人は其の身を容れられざるを惡み、故に〔難い乎〕の談を發す。將に以て亂俗を激まし、亦た君子の身を全うして害を遠ざくるを發明せんと欲するなり」(雍也、子曰不有祝鮀之佞而有宋朝之美章)。これらの言葉は、論語本文に即しての注釋たる制約をもとより免れないけれども、また同時に注釋者の哲

學の表明でもあるはずである。しからばこれらの言葉のうち、その性は卑佞と稱せられ(晉書六四 司馬道子傳)、また寧がその阿諛をあくまでにくんだ王國寶に對する暗喩がかくざれていると考えられないであらうか。寧は、「正道を以て人に求めざるを諂と爲す」(學而、子貢問曰貧而無諂章)とも説明しているのだが、王國寶がとりいつた司馬道子の周圍には、およそ儒家的正道から逸脱した人間が蝟集していた。當時の政情の内幕を暴露した許榮は、「今ま臺府の局吏、直衛の武官、及び僕隸婢兒の母の姓を取る者は、本と臧獲の徒にして郷邑の品第無きに、皆な命を得て議用せられ、郡守縣令と爲るも、並びに職を帶しつつ内に在って事を小吏の手中に委ぬ。僧尼と乳母は競いて親黨を進め、又た貨賂を受けて輒みだに官に臨み衆を領せしむ、」(晉書六四 司馬道子傳)とのべている。そのころ、優倡あがりの趙牙、あるいは錢塘の捕賊吏であつた茹千秋なるものが、いづれも賄賂を使って、魏郡太守や驃騎諮議參軍に任ぜられたりしていたのである。范寧も許榮とならんで時政の得失をしきりに上奏したといわれるが、儒家思想にもとづく正統的な士人意識の濃厚な彼の目に、かかる現實が「無道の世」、「亂俗」と

うつらないはずはなかつたであらう。みずから求めて豫章太守となつた寧には、亂世に「身を全うして害を遠ざくる」君子に、わが身を擬すところがなかつたであらうか。彼の解釋によると、「君子は人と偏頗厚薄有ること無く、唯だ仁義にのみ是れ親しむなり」(里仁、子曰君子之於天下也章)、「貨利を棄てて仁義に曉あやるきは則ち君子爲り。貨利に曉あやるくして仁義を棄つるは則ち小人爲り」(同上、子曰君子喻於義章)、すなわち君子とはなによりも利をかえりみず、仁義に親しむものでなければならなかつたのである。

ともかく彼は中央政界を去つた。そして豫章太守となると早々に時政を批判する上奏を行なつた。(一)土斷の實施。(二)人口稀薄な郡縣の整理。(三)地方長官に清平の人材を登用すべきこと。(四)送故吏の制の縮少。(五)奢侈放慢な官紀の肅正。(六)譴兵制の緩和。(七)成丁、半丁の年齢の引きあげ。これら七項目にわたる上奏には、政治不在の混亂をすくい、社會に安定をもたらしたいとする理想主義者の使命感が横溢している。そして彼の理想主義とは、第七項の主張に端的にみられるごとく、なによりも儒家の教説の復活とその

實現を夢見たものにはかならなかった。十六歳以上を全丁とし、十三歳以上を半丁としている現行の規定を、「年十九より十六に至るを長塲と爲し、十五より十二に至るを中塲と爲す、」という儀禮喪服傳の文章にのっとり、二十歳以上を全丁、十六歳から十九歳までを半丁に改めるべきだ、というのが彼の主張であつたのである。

ところで、「當今の刺史郡守は、幕府の事任皆な重く、

古の諸侯と異ならざるなり」というのが父范汪の考えであり、また「秦は侯を罷めて守を置く。位を繼がずと雖も、

皆な吏臣有り。古の諸侯に準ぜざるを得んや、」(通典九〇)とい

うのが范寧自身の考えであつた。つまり彼らは、州郡の長官を周代の諸侯に匹敵するものと考えるのであるから、豫章太守となつた寧は、中央の指令をまつことなく、自己の理想をその土地に行なう自由をもつてよいはずである。と

りわけ彼が豫章郡に郡學を設立したのは、亂脈をきわめる國都を離れて、彼の理想とするところの儒家的正道の行なわれうる小世界を構築せんとしたもののごとくみうけられる。その郡學においては儒家の古典が討究され、かくすることによって地方の風教をただすのが目的であつた。父范

汪も東陽太守であつたとき學校をおこしたことがあり、また寧自身も餘杭令時代に縣學を設立したことがあつたけれども、豫章の郡學は、規模においても意圖においても、さらに一そう雄大なものであつた。そこは郡學とはよばれるものの、經營の費用の一さいが私祿によってまかなわれる私塾の性格を多分にもつものであつたらしい。「寧の郡に在けるや、又大いに庠序を設け、人を遣わして交州に往きて磐石を採らしめ、以て學用に供す。舊制を改革し、常憲に拘わらず。遠近より至る者千餘人。衆費を資給するに一に私祿に出ず。并せて郡の四姓の子弟を取りて皆な學生に充て、課して五經を讀ましむ。又た學臺を起し、功用は彌よ廣し。」(晉書(一)九)范宣傳によると、豫章に住んでいた處士范宣の感化と范寧の郡學設立の結果、江州の人士が儒學を好むにいたつたといっているから、所期の目的をかなり達したものと思われる。

寧は「義疏」のある條下で、「切磋琢磨は器を成す所以なり、學徒を訓誘するは義茲に同じ、」(學而、子貢問曰貧而無諂章)とのべている。豫章郡學はこのような彼の考えを具體化したものにほかならない。そして彼が人間の教

化を重要視した背景として、つぎのような性論の立場をとったことが指摘できるであらう。

「人の生まれながらにして靜なるは天の性なり。物に感じて動くは性の欲なり（禮記樂記）。斯れ相い近きなり。洙泗の教に習いて君子と爲り、申商の術に習いて小人と爲る。斯れ相い遠きなり。然るに情性の義は說者同じからず。且しらく一家の舊釋に依つて云わん。性なる者は生なり。情なる者は成なり。性は是れ生まれながらにして之を有す。故に生と曰うなり。情は是れ欲動を起こして事に彰あむる。故に成と曰うなり。然らば性に善惡無くして濃薄有り。情は是れ有欲の心にして邪正有り。性は既に是れ全き生まれながらにして有れば、未まだ用に涉らず。唯だに名づけて惡と爲す可からざるのみには非ず、亦た目して善と爲す可からず。故に性には善惡無きなり。然るを知る所以の者は、夫の善惡の名は恒に事に就きて顯あらむる。故に老子（二章）に曰わく、（天下の美の美たるを知るといふは斯れ惡のみ。善の善たるを知るといふは斯れ不善のみ）。此れ皆な事に據つて談ず。情に邪正有りとする者は、情は既に是れ事なれば、若し欲を逐おいて流遷すれば其の事は則ち邪なり。若

し欲の理に中かなえば其の事は則ち正なり。故に情には邪有らず正有らずんば得ざるなり。故に易（乾文）に曰わく、

「利貞は性情なり」と（陽貨、子曰性相近也章）。

一家の舊釋とはだれの説をさすのか詳らかにしがたいけれども、寧はその説をうけて、人間の心を性と情とに分け、「生を性と曰う」、「性に善無し不善無し」とする告子の説、すなわち孟子によつて異端邪説とされた告子の説にもとづきながら、つぎのように考えたのである。性にはただ濃薄があるだけで善不善はなく、性の用であるところの情に邪正があり、この情が欲望に關係する。かく情に邪正があればこそ、情を制限してそれをたえず正に向かわせるための教化が必要なのであった。ともかく寧が郡學をおこし地方の教化を自分の責務と考えたのは、すでに指摘した儒學の用の側面を重視する彼の思想と深くかかわっている。彼は郡學を設立しただけではない。官紀の肅正を主張する彼は、豫章郡内においてそれを實現するべく、十五の屬縣に議曹を派遣して監督させ、また休暇で故郷に歸る屬吏たちからそれぞれ故郷の官長の成績を採訪させる一種のスパイ政治を考えだして、友人の徐邈からそのゆきすぎを

たしなめられたりしている（晉書九一）。

郡學をおこし、儒家の教説による地方の教化を夢みた寧の理想主義は、しかし突如として破綻をみる日がきた。おそらく、彼の理想主義があまりにも現實から遊離しすぎたためであろう。直屬長官の江州刺史王凝之が、彼をつぎのように彈劾したのである。

「豫章」郡城には先に六門有るに、寧は悉く改めて重樓と作し、復た更に二門を開き、前に合わせて八と爲し、私かに下舍七所を立つ。臣伏して尋ぬるに宗廟の設くるは各の品秩有るに、寧は自ずから家廟を置く。又た（所轄）十五縣に下して皆な宗廟を左にし社稷を右にし、之を太廟に準ぜしむ。皆な人力に資り、又た人の居宅を奪い、工夫は萬計なり。寧若し古制宜しく崇ぶべしと以わば、自のずから當に列上すべきに敢えて專輒し、惟だ心に任すに在り。」

寧はかつて豫章に赴任するさい、徭役の過重なることを上奏したことがあった。にもかかわらず、もし王凝之の彈劾文に惡意にもとづく誇張がないとすれば、古制を復活するために、自己の主張をも忘却したのであらうか。けっき

よく寧は罪に問われた。そのとき天門太守であつた長子の范泰は父の釋明に奔走した。孝武帝も寧が教化を思う一心から彈劾をうけたことを考慮し、そのため事件はなかなか落着をみず、とかくするうちに赦令によつて罪を許されるを得た。だがこれをきかけとして彼は官界を退いた。時に太元十六年（三九一）ないしは十七年である。⑥。そして以後、六十三歳で歿するまでのおよそ十年間は、丹陽における經學討究の生活にあけくれたのであつた。

四 穀梁傳集解の成立

これまで范寧の生活と經歷を中心に語ってきたが、彼の名が今日のわれわれに記憶されるのは、なによりも「穀梁傳集解」（以下、「集解」と略稱）の著者としてであるにちがいない。「初め寧、春秋穀梁氏には未まだ善釋有らざるを以て、遂に沈思すること積年、之が集解を爲る」と本傳に記されているように、「集解」は卒爾の作ではけつしてなかった。「集解」の序において、寧はみづからつぎのよう

にのべる。「升平の末、歳は大梁に次る。先君は北蕃より軫を廻ら

し、駕を吳に頼め、乃わち門生故吏と我が兄弟子姪とを帥^{ひき}い、六籍を研講し、次いで三傳に及ぶ。左氏には則わち服^{ふく}(虔)杜(預)の注有り。公羊には則わち何(休)嚴(彭祖)の訓有り。穀梁傳を釋す者は十家に近きと雖も、皆な膚淺の末學にして師匠を経ず。辭理典據は既に觀る可き無く、又た左氏公羊を引きて以て此の傳を解す。文義は違反^{はん}し、斯^{すな}わち害あるのみ。是に於いて乃わち名例を商略し、疑滯を敷陳し、博く諸儒同異の説を示す」。

穀梁傳に注する作業は、はやく升平五年(三六二)十月、父の范汪が北蕃、すなわち安北將軍徐兗二州刺史の地位を桓溫に奪われ、庶人の身分に貶されて吳に蟄居したときから準備されていたのであった。だが汪はほどなく世を去り、父の遺志を一日もはやく實現したいという寧の焦燥とはうらはらに、歲月は荏苒と流れてゆく。そこで、

「乃わち二三の學士及び諸子弟と各の識る所を記し、并せて其の意を言う。業未まだ終るに及ばずして、嚴霜は夏に墜り、從弟は彫落し、二子は泯沒す。天は實に予を喪^{はら}せり、何の痛か之に如かん。今ま諸子の言を撰し、各の其の姓名を記し、名づけて春秋穀梁傳集解と曰う」。

かく「集解」は、父の遺志を實現するものであるとともに、業なかばで夭折した第二子の雍、第三子の凱、從弟の邵の墓標としての意味をもつものでもあった。「集解」には范寧一人の名が冠せられているけれども、范氏一家の人たち、ならびに范氏をとりまく人たち、すなわち門生故吏といい、學士という人たちとの共同研究の成果であったことを、とくに銘記しておく必要がある。

「集解」莊公三年の條に、「五月、葬桓王、傳曰、改葬也、改葬之禮、總、舉下緬也」の解釋について、すでに寧の先君、すなわち范汪と蔡司徒、すなわち蔡謨(二八一—三五六)とが詳細に論じたこと記し、その解釋にはもとより汪の説が採用されている。范汪の名の明記されるのはこの一條にとどまるけれども、隨處に父の説がのこされていると考えてよいであろう。また楊士勛の疏は、序文中の故吏を、「昔日の君臣を謂い、江徐の屬是れなり、」と釋するが、「集解」に説をはいっている人たちのうち、范汪から范寧にひきつがれた穀梁傳注釋の事業に直接に關係したと思われるのは、つぎの八名である。

范泰 寧の長子。字は伯倫。〔桓十五・莊三十一・僖元・

六・文十五・十六・十八・宣元・十二・十七・成二・十四・襄三十

范雍 寧の第二子。字は仲倫。〔隱元・四・莊三・僖十五

・二十六(2)・文七・宣十一(2)・成九・十五・昭二十五

・二十六・定四・十・哀十四〕

范凱 寧の第三子。字は季倫。〔桓十四・僖五・二十二・

三十一・文九・十五・宣四・成二・襄二十一・二十九・昭二

十・定十三・哀元・八〕

范邵 寧の従弟。〔隱三・桓二・六・九・莊十三・僖四・十

七(3)・二十四・文四・六・宣二・襄七・二十五・昭十二・

定元・哀二〕

徐邈 晉書^(九)儒林傳に列せらる^(三四四)。字は仙民。

東莞姑幕の人。四十四歳のとき、謝安の推薦によって

出仕するまで、京口において學問にはげんでいた。出

仕してからは寧と親交があった。いわゆる二三の學士

の一人であらう。『經典釋文』序録と『隋書經籍志』

を参照すると、彼には「春秋穀梁傳(注)」十二卷、

「春秋穀梁傳義」十卷、「答春秋穀梁義」三卷などの

著作がある。范寧傳には、「集解」が世に出たあと、

「既にして徐邈復た之が注を爲り、世は亦た之をも稱

す」とあるから、「集解」とは別個に、それにくれて成立したものであらう。〔隱三・八・桓二・十三・十

七・莊三(2)・六・二十六・僖十五・三十・三十二・宣八・

成三・十四・十六・昭九・二十・二十七・定元〕

徐乾 『經典釋文』序録によると、字は文祚、東莞の

人、東晉の給事中とある。徐邈の一族であらう。彼に

も「穀梁傳注」十三卷がある。〔桓十・莊六・二十四・

文元・襄三十・哀七〕

江熙 『經典釋文』序録によると、字は太和、濟陽の

人、東晉の兖州別駕とある。范汪の徐兗二州刺史時代

の故吏であらう。彼は衛瓘、繆播、樊肇、郭象、蔡

謨、袁宏、江淳、蔡系、李充、孫綽、周瓌、范寧、王

珉ら晉代の論語注釋家十三人の説を集めた。それがさ

らに皇侃の「論語義疏」にひきつがれたのである。

〔桓二・三・莊三・八(4)・十二・二十一・閔二・僖元・

四・五・二十四・二十七・成八・哀二(2)・三〕

鄭嗣 不明。〔桓十四(2)・莊二十一・僖八・二十八(2)・

文元・四・宣二・八・成十二(2)・襄二十三・二十七(2)

・三十・定二(3)・四・哀元〕

※「」内は引用箇所を示す。たとえば隱元は隱公元年の條

に、哀十四は哀公十四年の條にその説が引用されている。

また（一）内のアラビア數字は、その年にその説が數ヶ條にわたつて引用されていることを示す。

また穀梁傳義について薄叔玄なる人の質問に范寧がこたえた文章を楊士勛の疏に引くほか、「集解」には先人の説が豊富に引かれている。すなわち、董仲舒（一條）、京房（五條）、劉向（二〇條）、許慎（四條）、何休（三〇條）、鄭玄（三四條）、譙周（一條）、杜預（一三條）がそれであるが、そのなかで、「何休曰わく……、鄭君之を釋して曰わく……」という問答形式がめだつて多數をしめている。それらは「公羊傳解詁」の著者たる何休が、春秋三傳のうち、公羊傳の獨尊性を主張するために穀梁傳を糾弾した「穀梁廢疾」、それに對する鄭玄の反論である「起廢疾」からの引用であるにちがひなく、范寧は鄭玄の説をとつてそのまま穀梁傳の注としているのである。寧が先儒のなかで鄭玄にいたく傾倒していたことは、孫の范曄が後漢書鄭玄傳の論において語っている。「王父豫章君は先儒の經訓を考ふる毎に玄を長れりとし、常に以爲らく、仲尼の門も過る能わざるなりと。生徒に傳授するに及んでは、並びに

専ら鄭氏の家法を以てすと云う」、鄭玄の學統がいかにして范氏に伝えられたのか。ここに一つの推測をなりたしめるのは、寧の曾祖父の范曄（晉書九〇）が、遊學のため、一家をあげて南陽郡順陽縣から清河郡に移り住んだ事實である。それは三國抗爭のころのことであつたと考えられるが、清河は鄭玄の出身地の北海に近く、また清河第一の名望の崔琰（魏志一二）は、鄭玄にまじかく師事した高弟であつたから、范氏に鄭玄の學統が繼承された蓋然性はきわめてたかいとしなければならぬ。

范氏の諸子弟と門生故吏、學士たちが一堂に會して穀梁傳を討究するさまは、想像するだけでも壯觀であろう。そこでは自由で活潑な討論がくりかえされたにちがひない。そこに參加しているかぎりにおいては、官位の高下や年齢の長幼にかかわりなく平等な一人であつたであらう。まず一人が一條ごとに問題を提起すると、それについて各人が意見をのべあい、あるいは先人の説がひきあいにだされて、甲論乙駁、討論がねりつくされたすえに、もっとも妥當と思われる説が採用され、記録にのこされる。寧はおそらく、この自由討論における問題提起者、ないしは意見の

まとめ役としての役割をはたしたにとどまるであろう。

「集解」がかかる討論をへて完成したことを想像させる例をつぎに示す。

○「宣公十有二年春、葬陳靈公」をめぐって

「(問題提起者) 傳例に曰わく、得〔德〕を失なえるは葬らずと(昭公十三年)。君弑せられて賊をば討たざれば葬といわず、以て下を罪すとなりと(隱公十一年)。卒に日いい葬に時い

うは正なりと(襄公七年)。靈公は夏姫に淫し泄治を殺す(宣公九年)。

臣子は賊を討つ能わずして三年を踰えて然る後に葬る。而るに卒に日いい(十年夏五月癸巳、陳夏徵舒弑其君平國)葬に時いはい何ぞ邪。

泰曰わく、楚已に之を討てり矣(十一年冬十月、楚人殺陳夏徵舒)。臣子之を討たんと欲すと雖も討つ所無きなり。

故に君子は即きて之を恕し、以て臣子の恩を申ばす。國を稱して以て大夫を殺せば則ち靈公の惡は明らかならざるを嫌わず。葬を書して以て賊を討つを表わすも靈公の無罪を言わざるなり。三年を踰えて而る後に葬れば則ち國の亂れたること居りて知る可し矣。日月の小しく前却有るに非ざれば則ち時を書すも嫌わず」。

ここでは傳例に合致しないかに思われる經文が討論のテーマとなり、長子范泰の意見がもつともすぐれたものとして採用されているのである。

○「哀公二年、晉趙鞅帥師納衛世子蒯瞶于戚、納者内弗受也、帥師而後納者、有伐也、何用弗受也、以輒不受父之命、受之王父也、信父而辭王父、則是不尊王父也、其弗受、以尊王父也」をめぐって

「寧此の義に達せず。

江熙曰わく、齊の景公は世子を廢し、世子國に還れば篡と書す(哀公六年)。若し靈公は蒯瞶を廢して輒を立てたりとせ

ば則ち蒯瞶は復た曩日の世子と稱するを得ざるなり。蒯瞶を稱して世子と爲せば則ち靈公の輒に命ぜざること審らかなり。此れ矛盾の喩なり。然らば則ち王父の言に従うとするは、傳失するが似し矣。經に「衛の世子を納る」と云う。鄭の世子忽、鄭に復歸す(桓公十年)。世子と稱するは正を明らかにするなり。正を明らかにすれば則ち之を拒む者は非なる邪」。

衛の靈公の太子であった蒯瞶は、父の怒にふれて國外に亡命していたが、靈公の死後、晉の趙鞅、すなわち趙簡子

のあとおしで衛に復歸しようとする。しかし衛ではすでに蒯瞶の子の輒が靈公のあとをついでおり、目的をはたさない。傳文では、輒が王父、すなわち祖父靈公の命を受けて父蒯瞶の復讐を拒んだことをよしとするのであるが、寧はこの傳義を明らかにしえなかった。のちにふれるように、寧は序のなかでも、この傳文に従がうなら子にして父に叛くことになるのとべている。そこで、經文に世子と稱しているかぎり蒯瞶が依然として靈公をつぐべきものであること、したがってこれを拒んだ輒に非ありとして傳文に疑問をさしはさんだ江熙の意見を、一おうの意見として書きとめたのであろう。

右に示した二例からもわかるように、「集解」は本文の字義に即して、その合理的解釋を施すことを本来の目的としている。それは注釋であるために、とりあげられた素材である穀梁傳本文の制約を強くうけることはいうまでもない。だがかかる制約をうけつつもなおそこに示されているいくつかの特徴を指摘しておこう。そうすることは、范氏のあたりの學風を知るだけでなく、六朝時代における儒學のありかたを知る一つの手がかりにもなると考えられるか

らである。

周知のごとく、春秋三傳のうち公羊傳は漢代に流行し、鄭玄の出現以後、左傳がその地位にとつかわつたが、穀梁傳はいつの時代にも振わなかった。東晉においても事情は同様であり、元帝の時代に、太常卿荀崧は穀梁博士を學官に立てんことを奏請したけれども、「穀梁は膚淺なれば博士を置くに足らず、」として却下されている(荀崧傳晉書七五)。かかる穀梁傳を、わざわざ共同研究の對象にとりあげたのはなぜであろうか。すでに引いた序に語られていたとおり、左傳における服虔、杜預、公羊傳における何休、嚴彭祖のごとく、穀梁傳には安心して使用できる注釋が存在しなかったためである。理由はおそらくただそれだけであり、穀梁傳をとりたてて顯揚しようとする態度は認めにくいと思う。序のなかで范寧は、春秋三傳それぞれに得失のあることを指摘して、つぎのごとくいっている。

「左氏は鸛拳の兵諫を以て君を愛すとなし(莊公十、文公の納幣を禮を用うと爲す(文公)二年)」。穀梁は衛輒の父を拒めるを以て祖を尊ぶと爲し(哀公二年)、子糾を納れざるを内を惡むと爲す(莊公九年)。公羊は祭仲の君を廢すを以て權を行なう

と爲し(桓公十一年)、妾母の夫人を稱するを正に合すと爲す(隱二年)。兵諫を以て君を愛すと爲さば、是れ人主も得て脅やかす可きなり。納幣を以て禮を用うと爲さば、是れ喪に居りて得て婚す可きなり。父を拒むを以て祖を尊ぶと爲さば、是れ子爲りて得て叛く可きなり。子糾を納れざるを以て内を惡むと爲さば、是れ仇讐も得て容る可きなり。君を廢すを以て權を行なうと爲さば、是れ神器も得て闕う可きなり。妾母を以て夫人と爲さば、是れ嫡と庶と得て齊しく可きなり。此の若きの類は教を傷り義を害ない、強いて通ず可からざる者なり」。

三傳それぞれの得失は、つぎのような感覺的表現によつても要約されている。「左氏は艶にして富なるも其の失や巫。穀梁は清にして婉なるも其の失や短。公羊は辯にして裁なるも其の失や俗」。

穀梁を排する「穀梁廢疾」、左傳を排する「左氏膏肓」を著わすとともに、「公羊墨守」を著わして公羊傳だけを奉じた何休の態度、それはおそらく鄭玄が現われるまでの漢儒一般に通ずる態度であると思うが、それとここにみられる范寧の態度とは、かなり異質のもののごとくみうけられ

る。春秋三傳のうちくにどれ一つを顯揚するのではなく、それぞれの價值が階級序列的になしに併列的にとりあつかわれているからであり、かく一つの古典をあえて選ばない彼らの態度を、かりに教養主義の名でよぶこともできようか。すくなくとも彼らには精神上的のコスモポリタニズムがある。

しかし、彼らに指摘されるかかる教養主義が、穀梁傳に注する作業のなかで、柔軟な態度をとらせることになった他の一面を、われわれは見すごすことはできない。寧はさきに引いた序のなかで、從來の穀梁傳注釋者が、左傳あるいは公羊傳をもつて穀梁傳を解すことを不滿としていた。そのため「集解」では、穀梁をもつて穀梁を解さんがために、一條を釋すにあたって他の諸條をつきあわす方法にとめている。だがそれは、終始かたくなに守られた方法では必らずしもなかった。それどころか、さきの言葉と矛盾するがごとき言葉が、同じ序のなかに語られている。

「凡そ傳は經を通ずるを以て主と爲し、經は必らず當るを以て理と爲す。夫れ至當は二つ無きに、三傳の説を殊にするときは、庸んぞ其の滯る所を棄て、善を擇びて従がわ

ざるを得んや。既に俱に當らざれば則ち固より容に俱に失すべし。若し至言は幽絶にして善を擇ぶも從る靡ければ、庸んぞ並びに捨てて以て宗を求め、理に據りて以て經を通ぜざるを得んや。我の是とする所、理として未だ全くは當らずと雖も、安くんぞ當るを得ることの難きを以て通ぜんことを希うを自ずから絶つ可けんや」。

すなわち、傳はあくまで經を通ずるための方便にすぎないのである。一つの經文について、三傳それぞれに說のわかれる場合の多いことを、「集解」本文のなかでも、「文同じくして義異なる者甚だ衆し。故に一方を以て之を求む可からず」(隱公二年)、「寧謂うに、經同じくして傳異なる者甚だ衆し。此れ吾が徒の古人に及ばざる所以なり」(僖公三十二年)などのべており、もし穀梁傳が經の解釋として適當でないときには、他の二傳に従がつてよいと考えられたのである。たとえば僖公十四年の、「夏六月、季姬及繪子遇于防、使繪子來朝」なる經文の傳、「遇者同謀也」に附された「集解」にはいう。「魯の女は故無きに遠く諸侯に會し、遂に淫通するを得たり。此れ亦た事の然らざらん。左傳に曰わく、繪の季姬來寧す。公は之を怒るに繪子の朝せざるを以

てす。防に遇いて來朝せしむ。此れ人情に合するに近し。ここで人の情に合するかどうかを判定の基準として左傳の說に従がうべしとされていることは、一おう注意されてよいであろう。さらに、穀梁傳のみならず、他の二傳いずれとも適當でないと判斷される場合がありうる。そのときには、いずれに従うことなく、獨自の說を提出してよい。さきに例としてとりあげた哀公二年の條の江熙の說などがそれである。

かく范寧にとって、傳はかならずしも墨守すべきものとは考えられていなかった。いな傳ばかりではなく、經すらも、その一字一句を頑迷に固守する必要はなかった。成公元年の經文に脱落があるうことを推測している。「穀梁子は傳を作るに、皆な經を釋して以て義を言う。未だ其の文無くして横いままに傳を發す者有らず。寧疑うらくは、經の多十月の下に、季孫行父如齊、と云わん。此の六字を脱せん」。

穀梁を釋すに必らずしも穀梁をもつてする必要はない、目的はあくまで「理に據りて以て經を通ずる」ことにありと考えた寧には、それが理であるかぎり、儒家以外の說に

よって穀梁を釋すことも許容されてさしつかえなかった。定公十年の「集解」に、「雍曰わく、二國會するを離と曰う。各の其の是とする所を是とし、其の非とする所を非とす。然らば則ち是とする所の是は未まだ必らずしも是ならず。非とする所の非は未まだ必らずしも非ならず。未まだ必らずしも非ならざる者は人の眞非を非とす能わず。未まだ必らずしも是ならざる者は人の眞是を是とす能わず。是非紛錯すれば則ち未まだ是有らず。是非同じからず、故に離と曰う、」とあるこの思辯的な離の解釋が、莊子齊物論篇の瞿鵠子と長梧子の問答のなかに展開された論理をふまえること、いうまでもない。また僖公二十二年の「集解」に、「凱曰わく、道に時有り、時に勢有り。何ぞ道を貴ばん、時に合するを貴ぶ。何ぞ時を貴ばん、勢に順うを貴ぶ。宋公は匹夫の狷介を守り、徒らに恥を夷狄に蒙むる。焉くんぞ大通の方、至道の術を識らんやと、」ある大通の語が、莊子大宗師、秋水篇等に出る言葉であるばかりでなく、論旨の全體にわたって、莊子の自適の思想からの顯著な影響を認めてよいであらう。

范寧は「王弼何晏論」を著わし、清談の徒を糾弾した。

だが時代の風潮は、やはりこの一家にも例外なくおしよせていたといわねばならない。寧の子の雍や凱だけではない。父の范汪は司馬昱の清談グループにまじわったことがあるし、范曄の後漢書黃憲傳の論に、「余の曾祖穆侯(汪)以爲らく、憲は頽然として其れ順に處り、淵乎として其れ道に似たり。深淺もて其の分に臻る莫く、清濁も未まだ其の方を議せず。若し孔氏に門いりするに及べば其れ殆んど庶からんか」という、易を用い老子を使つてのこの人物批評は、「世說新語」に豊富な例を見いだす六朝清談の一つの型式にはかならない。

また汪の本傳に、「善く名理を談ず」と伝えられるのは、彼が緻密な論理を驅使する思辯的談論の名手であつたことを示す言葉であらう。それは、さきにあげた范雍の論理の展開のしかたと無關係ではない。

かく「集解」制作の基本的態度は、かなり自由なものであることを知つた。范寧たちにとって、眞理は經のなかにこそあるのであり、あまりにも繁瑣な議論にこだわることは、かえつて經の眞理の把握にとって妨げになると考えられた。「舊史」には詳略有り、夫子は因つて革ためず。故に

知るならく、曲説は巧みなりと雖も遠きを致すには則ちわ
 滯る」(元年)。^(註公) 繁瑣な議論にこだわるよりも、「理に據りて
 以て經を通ずること」こそが、彼らの最大の課題であつた
 のである。^(註公)

五 范寧の門閥觀

さきによつたように儒學の用の側面を重視した范寧は、
 その具體的なあらわれである禮學のエキスパートであり、
 「禮雜問」十卷の著作があつたという。儒學が一般に不振
 をきわめたといわれる六朝時代に、禮學だけは例外的に研
 究のつまれた分野であつたことは、われわれの常識であ
 る。王朝の制度典禮、門閥の軌儀にかかわる實學としての
 役割をはたしたのみならず、門閥が門閥としての秩序を維
 持し、門閥の成員が同族としての意識を強固にしてゆくう
 えに、つまり門閥をなりたしめる原理としても、禮學は
 有効でありえた。門閥をなりたしめる原理としての禮學
 は、門閥が淵源してきたところの祖先の祭祀と門閥内にお
 ける各成員の喪服を、主な對象としてあつかう。前者が時
 間的な縦の面に注目するものとすれば、門閥各成員相互の

親疏の關係をあつかう喪服は、空間的な横の面に注目する
 ものであり、范寧の議論ももっぱら祭祀と喪服に集中して
 いる。そして第三子の范凱も、「集解」桓公十五年におい
 て、「夫れ人を治むるの道は禮より急なるは莫く、禮に五
 經〔吉凶軍嘉賓〕有つて祭より重きは莫し」と、禮記祭統
 を引きつつ、祭祀の重要性を強調している。

ところで、「通典」(六)に父范汪の「祭典」が引用され、
 そこには寧の意見もあわせのせられている。「祭典」であ
 つかわれるのは、儀禮喪服傳の「何如而可爲之後、同宗則
 可爲之後、何如而可爲人後、支子可也」なる文句をめぐつ
 て、大宗と小宗のいづれを重視すべきかという宗法問題で
 あり、門閥のありかたと深くかわる問題であつたと考え
 られる。范汪はまずつぎのようにいう。

「小宗を廢するも昭穆は亂れず。大宗を廢すれば昭穆は
 亂る。先王の大宗を重んずる所以なり。豈に小宗を廢して
 以て大宗を繼がざるを得んや」。

彼によれば、小宗の犠牲においても大宗は連綿として繼
 承されてゆくべきものであり、大宗の宗主さえはつきりし
 ておれば、たとい喪亂の時代を経験しようともその家が斷

絶するようなことはおこりえない。かつ、「同姓は百代不婚なること周道なり。而るに姓は自のずから變易す。何に由つてか知るを得ん。夫れ既に知らざれば或容は婚を得る者有らん。」宗主がはつきりしていなければ、同姓不婚の禁忌すらおかされるおそれがある、というのである。

これに反して范寧は、大宗の重要性を認めつつも、小宗はけつして廢すべきでないと主張する。なぜなら父母の恩は莫大であり、子孫のたえることは最大の不孝であるから、もし小宗の犠牲において大宗を繼承してゆこうとするときには、「生きては養を敬しまず、没しては享を敬しまず。生人の本は盡くされず、孝子の事は終たす靡く、」それは「人子の情を通じ、經代の典と爲す所以」ではない。また、「夫れ嫡子存すれば則ち奉養に主有り、嫡子亡ぶれば則ち烝嘗寄す靡し。是を以て（儀禮喪服傳に）支子〔嫡妻の第二子以下〕は出でて（大宗を）後ぐの義有るも廢嫡の文は無し。故に嫡子は大宗を後ぐを得ず。但だ支子を以て大宗を繼ぐと云わば則ち義は已に暢ぶ。應に復た嫡子は大宗を繼ぐを得ずと云うべからず。此れ乃ち小宗は絶つ可からざるの明文なり。若し大宗無きも唯だ族を收

むるを得ざる耳。小宗の家は各の昭穆を統ぶ。何ぞ必らずしも亂れんや。」

これにつづけてふたたび范汪の意見がつづき、大宗を重視すべきか、それとも小宗を重視すべきかをめぐって、父子のあいだで意見がわかれるのであるが、もしこの問題を當時の門閥制にひきあてて考えてみるならば、范汪は門閥の統體としての永遠不滅性を希求したのであり、范寧は門閥内の各分派の獨自の存立發展を認めんとしたのだと考えられよう。門閥がそのころ次第に分解をはじめていたことを思うならば、范寧の意見の方が實情に應じたものであったと考えられるし、また一代かぎりでも門閥の地位を築きあげた范汪が、大宗の重要性を強調するのは當然であつたともいえる。しかしながら、二人いずれの主張にしたがうにしても、宗子なり嫡子なりによって、「家」は永遠にその生命を維持しつづけるべきものと觀念されていたことにおいて變りはない。血統はあくまで保たねばならないのであり、寧は謝安に與えた書簡のなかで、當時かなり廣範圍に行なわれていたらしい異姓養子の風習をきびしく批判している。「子無くして人の子を養う者は、自のずから同族

の親を謂う。豈に異姓に施さんや。今の世之を行なうこと甚だ衆し。是れを人倫昭穆の序に逆らい、經典紹繼の義に違ふと爲すなり」(通典六九)。また「集解」襄公六年に、「家は異姓を立てて後と爲せば則わち亡び、國は異姓を立てて嗣と爲せば則わち滅ぶ、」とものべているのである。

小宗を重視すべしとする寧の主張のなかに、人の子としての情を尊重する言葉がみえていたが、彼は肉親間の情愛をはなはだ尊重した。そして肉親間の情愛を基礎として成立する家族關係を、一さいの社會關係の上位に措定しようとしているかにみえる。論語先進篇の「顔淵死、門人欲厚葬之、子曰、不可、門人厚葬之、子曰、回也視予猶父也、予不得視猶子也、非我也、夫二三子也」の義疏には、「回は父を以て我〔孔子〕に事うと雖も我は子を以て回を遇するを得ず。師徒と曰うと雖も義は天屬より輕し。今ま父は厚く葬らんと欲す。豈に制止するを得んや、」なる寧の説が引かれている。顔回の厚葬に反對した孔子、しかしけつきよく孔子の反對がいれられなかったことを、寧は馬融の説をうけて、顔回の父が門弟たちの厚葬のすすめに従ったためであると解釋し、顔回と父とのあいだの肉親關係―天屬―が

孔子と顔回とのあいだの師弟關係より強力であることを認めたのである。家族關係が師弟關係の上位におかれることは、あるいは當然であるかも知れない。だが家族關係が王法よりすらも優先すべきことを、子路篇のかの有名な言葉、「父爲子隱、子爲父隱、直在其中矣」の、やはり同じく「義疏」のなかで、寧はこうのべるのである。「夫れ所謂る直なる者は其の道を失なわざるを以てなり。若し父子相い隱諱せざれば則わち教を傷り義を破り、不孝の風を長ばす。焉くんぞ以て直と爲さんや。故に相い隱すをば乃ち直と爲す可き耳」。ここまでなら、本文に導かれたままの注釋であるとみることもできよう。だがつづけてつぎのようにのべるのは、きわめて注目されねばならない。「今ま王法は則わち期親以上の相い爲に隱すを得るを許し、其の罪を問わず。蓋し先王の典章に合せり。すなわち、家族關係が王法に優先する、というよりもむしろ王法―律―が、かかる家族間に成立する情愛を容認し、それを體系のなかにとりいれていることを、先王の典章に合致したものと讃美しているのである。これこそ當時の門閥貴族のいだいていた世界觀のなによりも的確な表現ではな

いであろうか。なぜなら、六朝の社會には、公的な秩序を具現する王法とは別箇に私的秩序が存在し、その兩者は必ずしもあい矛盾し、あい對立して存在したのではなく、むしろ後者が前者を支え、成りたしめる關係にあつたと考えられるからである。この私的秩序を代表するのは、いうまでもなく門閥貴族であつた。^⑨そして門閥とは、家族關係を基礎としてこそ成立すべきものであつた。極言すると、個人はいまだ門閥のなかに埋没しており、門閥のなかの一成員としてのみ存在したものである。そのことは、たと個人が自由な自己完成につとめたとしても、門閥という全體を通すことによつてはじめて全き表現をとりえたと言いかえることもできよう。すでに検討した「集解」成立の經過は、かかる事情を雄辯にものがたっている。

六 結 語

禮學を主とする儒學を強力に鼓吹した范寧は、しかしまた一方において佛教ともかなり深い交渉をもつた。その點を考えないかぎり、彼のすべてを語ることにはならないであらう。そこで寧と佛教との交渉を概観し、かつ彼の思想

全體のなかで、儒佛がいかに關係しあつていたかを考えることによつて、結論としたいと思う。六朝士大夫における儒佛の出會は、いつの場合にも興味ぶかい問題である。

范氏と佛教との交渉はすでに父范汪の時代にはじまつており、宋の元嘉十二年（四三五）、文帝の質問にこたえた何尙之は、東晉時代の崇佛家の一人として范汪の名をかぞえあげている（高僧傳七）。そして寧もまた佛教に無關心ではなかつた（無關心どころか、むしろ積極的な關心を示している。興寧中（三六三—三六五）、京師にやつてきた苦行僧慧受のために王坦之が庭園を寄進したとき、その東・西・南にそれぞれ位置していた王雅、劉鬪、范寧の第宅もそろつて寄進され、そこに安樂寺が建立されたという（高僧傳二三）。また豫章太守時代には、佛の生誕を祝うための四月八日の請佛の儀式を行なつたり（世說新語言語篇）、慧遠の弟である慧持を廬山から招いて、法華、阿毘曇の大小乘教學をあわせ講じさせ、その聽講者は「四方より雲聚し、千里より遙かに集まる」盛況ぶりを示したといわれる（高僧傳六）。廬山に小乘教學をもたらししたのは僧伽提婆であつて、彼は太元十六年（三九一）廬山に來たり、その年の冬から翌年にか

て「阿毘曇心論」四卷を譯出したのであった。^⑩寧が豫章太守の地位を失脚したのは太元十七年十月を下ることはないと考えられるから、慧持が豫章に招かれたのは、小乘阿毘曇教學が廬山に紹介されてごく間もないころのことになる。かく寧は佛教界の新思潮にきわめて敏感な興味を有していたこと、また廬山教團と密接な交渉をもったことが推測される。ことに後者の推測を強固に支えてくれるのは、寧と京師にいた王珣とのあいだに、つぎのような書簡の往復がなされていることである。

珣「遠公（慧遠）と持公（慧持）と孰れが愈れるや」。寧「誠に賢兄賢弟爲り」。珣「但だ兄の如くならしめん」とすら誠に未まだ有り易からざるに、況んや弟の復た賢れるをや」（高僧傳六）（慧持傳）。

この往復書簡は、慧持のみならず、廬山教團の主宰者たる慧遠その人とも、その人格を知悉するほどの深い交際を寧がもったことを想像させる。慧遠の白蓮社結成にあたって、寧も入社をすすめられたと伝えられること、それが後世につくられた傳説にすぎず、歴史事實ではないとしても、かかる傳説が生まれても不思議ではないだけの背景は

存したのである。かつ慧遠の在俗の弟子として廬山におもきをなし、十八高賢の一人にかぞえられる周續之は、がんらい豫章郡學において、寧から五經ならびに緯候の業を授かり、一門の顔淵とまでよばれた高弟にほかならなかった（宋書九三）。

寧が佛教のなかでも、とりわけ慧遠にひきいられた廬山教團と密接な交渉をもった理由として、彼の任地の豫章と廬山とが地理的に近接していたことがまず考えられるであろう。また慧遠が、在俗の弟子である宗炳、雷次宗らに喪服經を講じたというごとく、禮學にも通曉していたことは、佛教以外の面での交渉をもちやすくしたのであろう。さらにまた慧遠が、従来の格義佛教をしりぞけた道安の主張を繼承發展させたことは、^⑪「王弼何晏論」の著者たる寧に一そうの親近感を與えたであろう。だが寧を廬山教團に結びつけたより重要な事情は、つぎのようなものではなかったか。

寧が豫章太守であったころの京師の佛教界は、許榮によって手きびしく批判されているように（晉書六四）（司馬道子傳）、時の執權たる司馬道子の政治の亂脈とあい呼應するもののごと

く、腐敗墮落の極にあった。「形を残さない髪を翦りて復除を要求するもの有るに至る」と寧自身がのべているのも、

おそらく穢雑な要素をふくんだ當時の佛教界への批判であろう。しかし廬山教團だけはいささか様子がちがっていた。

「遠規」の制定に端的に示されるごとく、そこでは教團の肅正が聲高に叫ばれていたのである。禮學者范寧にとって規律ある僧團の存在は、奉ずるところが儒佛のちがいにこそあれ、こころよいものと感ぜられたにちがいない。彼が廬山教團につよくひかれた理由を、なによりもこの點にまとめてよいのではないか。人間教化の具たるところに一致點を見いだしたのではないであろうか。彼にとって眞理を體すると考えられたものは、やはり儒家の經をおいてはかにはなかったであろう。たとい彼が、「至言は幽絶にして善を擇ぶも從る靡ければ、膺んぞ並びに舍てて以て宗を求め、理に據りて以て經を通ぜざるを得んや」とのべるとき、經のふくむ眞理がすでに經そのものをはなれて普遍的な眞理——宗あるいは道——への志向を隱微ながら示しているとしても、王坦之の「廢莊論」などとはちがってそれはあくまで隱微でしかなく、まして寧がそこから儒佛に通ずる

眞理を導きだし、いわゆる儒佛一致論の立場をとったとは考えにくい。

ところで寧の子の范泰は劉宋初の祇洹寺の大檀越となり、泰の子の范曄はかえって佛教否定論者となった。それらのことはいずれ稿をあらためてのべるべきであるが、ここではただ一つのことだけを記して、將來への展望としておこう。それは寧が、「聖人は物に應じて教を作す」(義疏、子罕、子曰主忠信章)といっていることである。この場合の聖人が儒家の聖人をさすというまでもないけれども、しかし、歴史的社會的條件に限定された對象に應じて聖人は教説をかえてあらわれるというこの言葉の意味する論理は、やがて范泰、范曄にうつがれ、聖人が儒佛を通じた聖人概念におきかえられて、范泰の場合には、啜食論争のなかで、佛教に附隨したインド的習俗を否定するため、范曄の場合には佛教そのものを否定するために用いられるにいたるのである。

註

- ① 「歷代人物年里碑傳綜表」は、范寧の生卒を咸康五年(三三九)——隆安五年(四〇一)とする。ところで宋書六〇范泰傳に

は、寧の死を司馬元顯專權と桓玄輔晉のあいだにおくから、その歿年はもつともおそくみつもつても元興元年（四〇二）、また晉書本傳には六十三歳で歿したというから、生年は咸康六年（三四〇）となる。したがって「碑傳綜表」の説はかなり妥當と思われる。あえて異を唱えるだけの理由もないから、「碑傳綜表」の説に従っておく。

- ② 「世說新語」方正篇注に引く「王氏譜」にいう。「王坦之娶順陽郡范汪女、名蓋、卽寧妹也」。

- ③ かかる思想の先蹤をなすのは王弼である。「王弼曰、聖人體無、無又不可以訓、故言必及有、老莊未免於有、恒訓其所不足」「世說新語」文學篇」。

- ④ 孔子と老子の同一性を説いたのは、何晏にはじまるであろう。「世說新語」文學篇注に引く「文章敍錄」にいう。「自儒者論、以老子非聖人、絕禮樂學、（何）晏說與聖人同」。

- ⑤ 當時の地方官の在職期限が六年であったこと、ほかならぬ寧の「陳時政」にのべられている。「守宰之任、宜得清平之人、頃者選舉、惟以卹貧爲先、雖制有六年、而富足便退」。

- ⑥ 「通鑑」は、范寧の豫章太守轉出を太元十四年の條にかけるけれども、「宋書」九三隱逸周續之傳によると、周續之（三七七—四二三）が十二歳のとき、すなわち太元十三年に、寧がすでに豫章に着任していたことを知る。

- ⑦ このような考えかたは、すでに後漢代からかなりひろく行なわれたものであろう。たとえば「後漢紀」卷九永平三年の條に、陳留太守傳宗なるものの言として、「昔者諸侯、今之二千石也」とみえている。

- ⑧ 寧が彈劾をうけたとき、長子范泰は天門太守であった。ところで宋書六〇范泰傳によると、泰は外弟の荊州刺史王忱のひきたてによって天門太守となり、太元十七年（三九二）十月、王忱が官に卒するまでその任にあったのである。一方、寧を彈劾した王凝之が江州刺史であったのは太元十六年から二十年までの間であるから、罷免事件は太元十六年ないしは十七年のできごとでなければならぬ。

- ⑨ 楊士勛の疏には、「所云名例者、卽范氏所據別爲略例百餘條、是也」と説明し、また「四庫提要」にはつぎのようにいう。

「自序有商略名例之句、疏稱寧別有略例百餘條、此本不載、然注中時有傳例曰字、或士勛割裂其文、散入注疏中歟」。

- ⑩ 「世說新語」假譎篇には、東陽に蟄居していたといっている。

- ⑪ 范汪は六十五歳で卒したというが、生卒年はわからない。彼は六歳で江南に渡り、荊州刺史王澄からその將來を約束されたという。王澄は永嘉元年（三〇七）に荊州刺史となり、六年（三一二）に官に卒している。また蘇峻の亂のとき、すなわち咸和二年（三二七）、汪は弱冠にして京師にやってきたばかりであったという。あたえられたこの二つの條件を満足させるためには、汪の生年は永嘉元年（三〇七）、したがって卒年は咸安元年（三七一）あたりに定めるのが妥當であろう。

- ⑫ 范汪と蔡謨の説はともに「通典」一〇二にみえ、「儀禮」喪服子夏傳の「改葬總」の文章を、改葬のときにも本葬のときと同じく、總麻から斬衰にいたる五服を適宜に反服することと解している。「集解」莊公三年の條もその説に従がっている。す

なわちこの條は、桓王の改葬のことを記したついでに改葬の服を説明したのであって、「舉下編」の句を、最下の總麻服を擧げて最上の斬衰にいたるまでそれぞれ本服を用いること、という意に解し、桓王の改葬の時にすべて總麻服でしましたとする説に反対している。藤川正數「魏晉時代における喪服禮の研究」第二章を参照。

⑬ 謝安は太元十年（三八五）に卒しているから、徐邈四十四歳のときにはすでに世になく、なにかのまちがいであろう。

⑭ 鄭玄の「起廢疾」からの引用のほか、五帝を黃帝・顓頊・帝嚳・帝堯・帝舜とかぞえる説（隱公八年）、三望を海・岱・淮の祭であるとする説（僖公三十一年）などは鄭説を襲ったものである。また「通典」九一には、無服之殤の馬融と鄭玄の解釋の可否をめぐる戴逵と論争し、鄭玄説に従ったことを傳えている。

⑮ 皮錫瑞「經學通論」卷四春秋「論春秋兼采三傳不主一家始於范寧而實始於鄭君」。

⑯ 「集解」に對する六朝時代の評價について簡単に附言しておきたい。「集解」出現後もしばらくは魏の麋信注が舊來どおり用いられたが、宋の元嘉年間に顏延之が國子祭酒となると、國子學において「集解」をとりあげ、麋信注と併用したらしい。「南齊書」三九陸澄傳には、南齊の永明中に領國子博士となった陸澄の王儉にあてた書簡をのせていう。「穀梁、泰元舊有麋信注、顏益以范寧、麋猶如故、顏論閏分、范注當、以同我者親」。范寧の閏分についての説は、文公六年の條にみえている。ところで、南齊の國子學ではまた麋信注だけを用いたのであ

り、そのことについて陸澄はつづけていう。「常謂穀梁劣公羊、爲注者又不盡善、竟無及公羊之有何休、恐不足兩立、必謂范善、便當除麋」。それに對する王儉の返書には、「穀梁小書、無俟兩注、存麋略范、率由舊式」、といっている。つまり、「集解」にはあまり注意のはられないのが實情であつた。それとこのも、王儉の指摘するように、穀梁傳そのものが小書としてかえりみられなかったという事情によるところが少なくないであらう。事態は北朝においても變りはなく、「北史」八一儒林傳序に、「其公羊穀梁二傳、儒者多不屑懷」といっている。

⑰ 拙稿「顔之推小論」（『東洋史研究』二〇卷四號）第三節參照。

⑱ 拙稿「抱朴子の世界（上）」（『史林』一九六四年五號）第四節參照。

⑲ 塚本善隆「中國初期佛教史上における慧遠」（『慧遠研究』研究篇）第三節。

⑳ 注⑧參照。

㉑ 湯用彤「漢魏兩晉南北朝佛教史」三七一ページ。

㉒ 塚本氏前掲論文。

㉓ 司馬道子の尊崇をうけた支妙音尼（比丘尼傳一）が、范寧の豫章太守轉出一枚かんでいたことも、このさい想起すべきである。

〔補注〕

潛研堂文集卷二「何晏論」は、范寧の「王弼何晏論」の立場に反對して、王何を辯護するものである。